

Urban Design Lab. Magazine

2016.09.30 vol. 245 特集号



彼らの見てきた風景

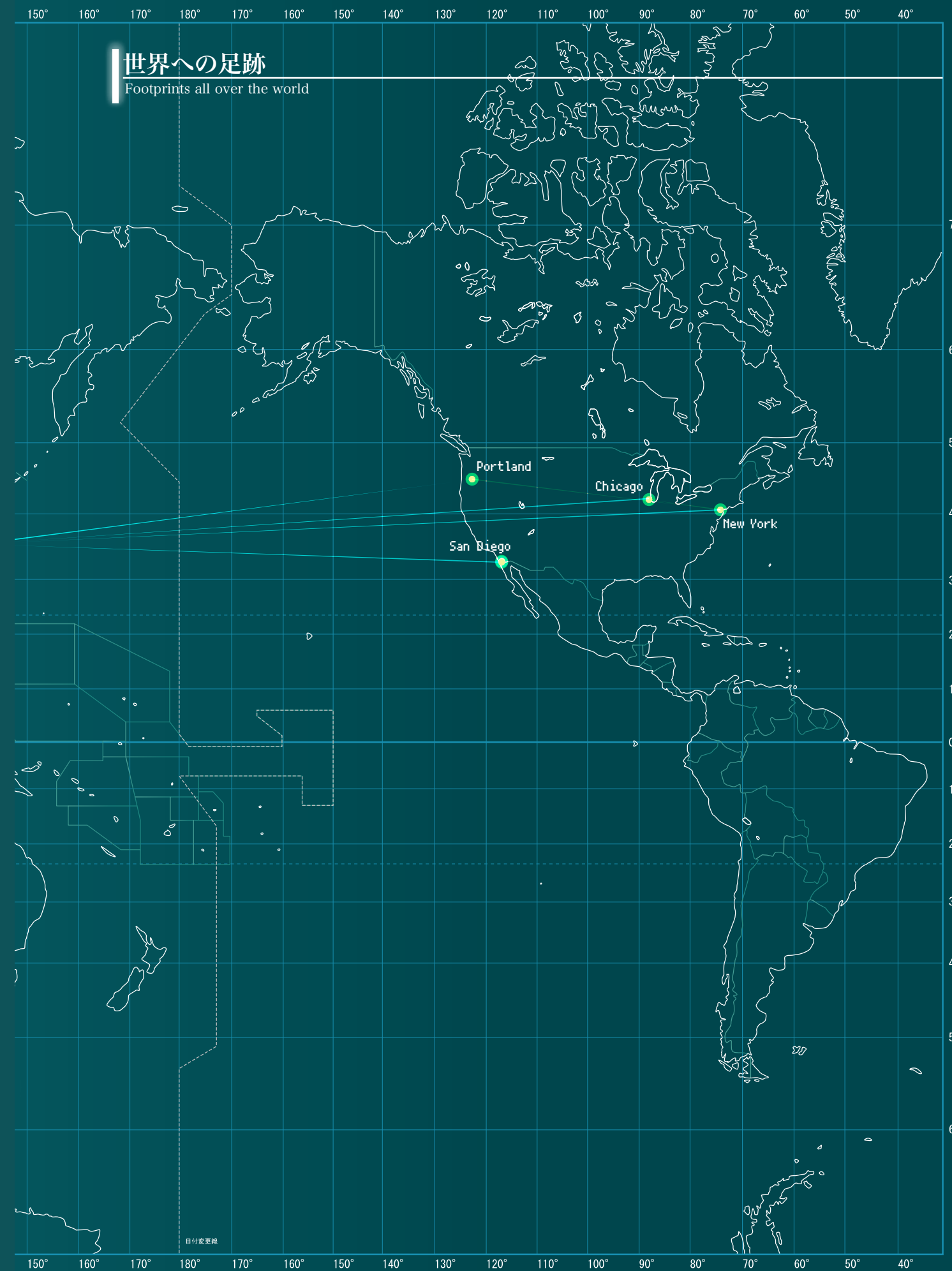
T R A V E L L O G S I N S U M M E R

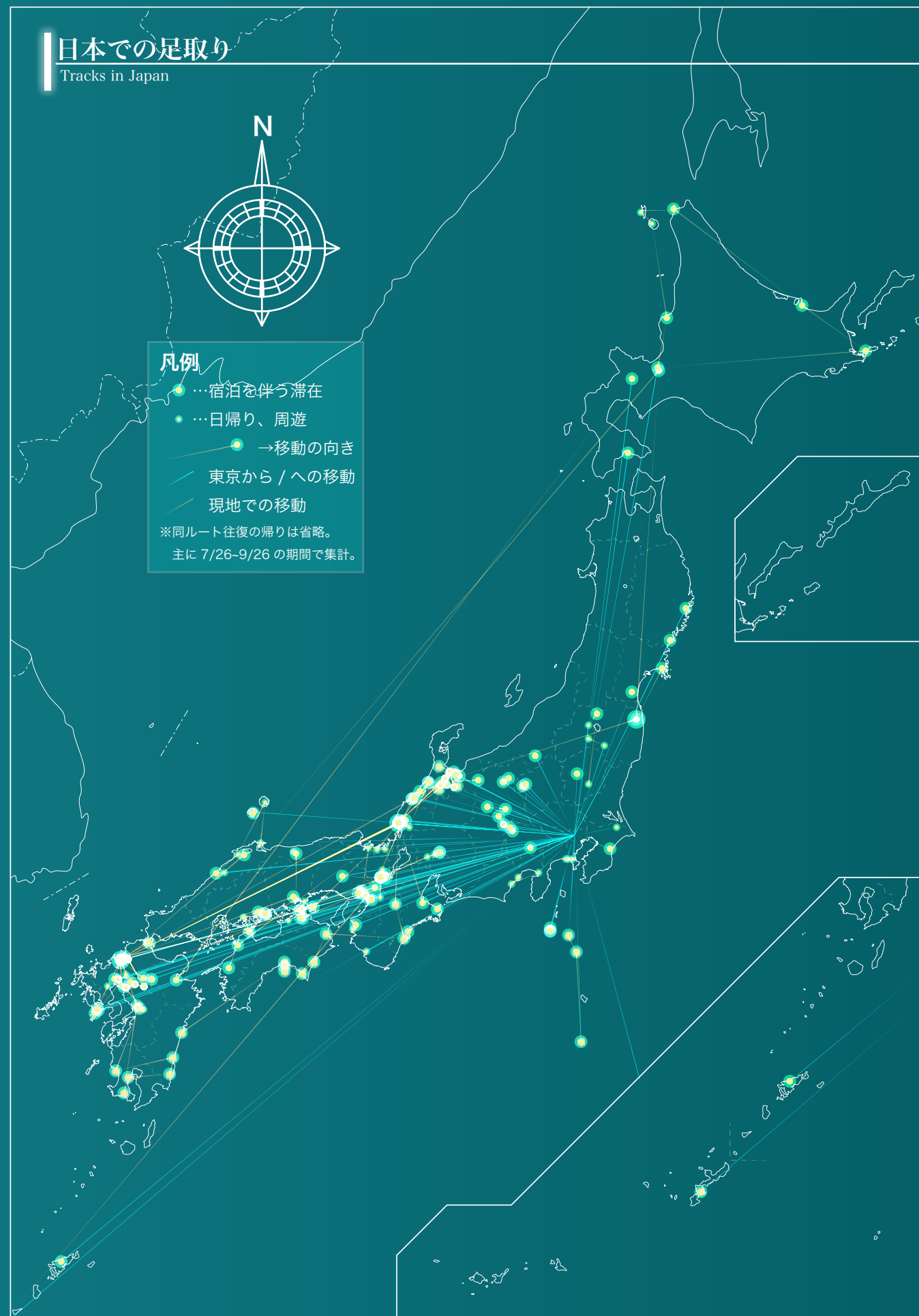
東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/>

夏の移動の軌跡 p.2
研究室の見てきた風景 p.6
「街の灯」を想像するために
ー西村先生インタビュー p.18

編集長：黒本剛史
編集委員：富田晃史 中井雄太
浜田愛 王誠凱 神谷安里沙
田中雄大 中村慎吾 松田季詩子





先生方の軌跡

Our Professors' tracks

西村幸夫 教授

Prof. Yukio Nishimura

7/29-30 長野県須坂市、7/31-8/6 ブータン・パロ / テンブー《国際 WS》、8/9-12 和歌山県和歌山市《和歌山大集中講義》/ 雑賀崎、8/18-20 日田市《学会》、8/22-24 中国・北京《精華大での会議》、8/25 北海道函館市、8/31 富山県富山市、9/2-4 石川県加賀市、9/9 福島県新白河 / 下郷町、9/10-11 広島県福山市鞆の浦《会議》、9/13 葉山、9/16-18 福井県坂井市三国《町並み塾》

中島直人 准教授

Assoc.prof. Naoto Nakajima

7/17-26 オランダ・デルフト等、デンマーク・コペンハーゲン《出張》、7/30-31 岐阜県各務原市《帰省》、8/13-23 岐阜県各務原市《帰省》、9/4 岐阜県各務原市《帰省》、9/5-6 京都府京都市、9/10-11 岐阜県各務原市《帰省》、9/13-19 アメリカ・ニューヨーク《調査》、9/24-25 岐阜県各務原市《帰省》
※日帰り出張は省略いたしました。

中島伸 助教

Assistant prof. Shin Nakajima

7/17-29 オランダ・デルフト等、デンマーク・コペンハーゲン、スウェーデン・ストックホルム《IPHS 大会 / 調査》、8/2-3 静岡県三島、焼津、清水、静岡市《実習旅行》、8/22-25 佐賀県佐賀、柳川市、福岡県八女市、福岡市《調査 / 建築学会》、8/26-28 福井県坂井市三国《調査》
9/5-6 京都府京都市《研究会》、9/6 岐阜県大垣、岐阜市《調査》

森朋子 助教

Assistant prof. Tomoko Mori

8/22-23 中国・北京《APSA 会議》、8/24 福岡県福岡市《建築学会》、8/25 福岡県うきは市《伝建地区・新川・田尾地区の水害復興に関する市役所ヒアリング調査》、8/26 大分県日田市、福岡県朝倉市、佐賀県吉野ヶ里町《文化的景観・小鹿田焼の里、伝建地区・秋月、吉野ヶ里遺跡視察》、8/27-30 京都府京都市《世界考古学会議参加》、9/2-9/7 ネパール・カトマンズ《カトマンズ PJ 調査》

永野真義 助教

Assistant prof. Masayoshi Nagano

8/22-23 兵庫県西宮市《知人の事務所訪問》、8/23-24 大阪府大阪市《帰省・新歌舞伎座を見に》、8/24-27 福岡県福岡市博多《建築学会・リノベーション事例見学》、北九州市小倉《リノベーション事例見学》、門司港《レトロな町並み探訪》、9/9-17 アメリカ・ニューヨーク《調査・打合せ》、9/22-23 長崎《調査・打合せ》

コラム：総移動距離で月面をめざす

Fly to the Moon

アンケートに回答して頂いた方々 27 名について、移動の軌跡を直線距離で合計し、月までの距離と比べてみました。
残念ながら月面着陸は果たせませんでしたが、メンバーが活発に動いている様子の一つの目安になるかと思います。

※直線距離で測定
端数は 5km 単位で切り上げ

地球—月 384,400km

研究室の移動距離合計 352,705km

地球一周 (赤道) 40,070km



研究室の見てきた風景

Records of Our Treads and Experiences

「夏の移動の軌跡」では、皆さんの移動を鳥の目で見してきました。一つ一つの行き先で、どんな体験をし、どんな風景を見てきたのでしょうか。皆さんにご協力いただき、最も印象に残った旅について、紀行文をお寄せいただきました。

(編集 プロジェクトの記録：M1 中村 個人の記録：M2 黒本)

Index

▶ プロジェクトの記録

[福島 PJ] 高校生と石巻・女川へ	川田さくら	(M2)	—7
[三国 PJ] 九州のまちなみ・空き家再生事例見学	矢吹剣一	(D2)	—8
[三国 PJ] 越中八尾 - おわら風の盆視察 -	越野あすか	(M2)	—9

▶ 個人の記録

1. 国内の街並みをめぐる

大分県 小鹿田焼の里	森朋子	助教	—10
島根県 温泉津	中井雄太	(M2)	—10
栃木県 日光	砂塚大河	(M2)	—11
富山県 砺波平野	神谷安里沙	(M1)	—11
熊本県 熊本市	田中雄大	(M1)	—11

2. ふるさとに帰る

岐阜県 各務原市	中島直人	准教授	—12
兵庫県 西脇市・京都府 伏見区	柏原沙織	(D3)	—12
愛媛県 今治市	三文字昌也	(M1)	—12

3. 離島を訪ねる

島根県 海士町	黒本剛史	(M2)	—13
東京都 青ヶ島村	中村慎吾	(M1)	—13

4. 海外の市街地を知る

アメリカ ニューヨーク	永野真義	助教	—14
イギリス レッチワース	西川亮	(D3)	—14
ブータン パロ・ティンブー	児玉千絵	(D3)	—15
イタリア ヴェネツィア	宮下貴裕	(D2)	—15
ネパール カトマンズ・コカナ	濱田愛	(M2)	—16
イタリア ローマ	松田季詩子	(M1)	—16
アメリカ シカゴ	福本遼子	(B4)	—17

プロジェクトの記録

Travel on Project Activities

高校生と石巻・女川へ

——福島プロジェクト



▲石巻・子どもセンターらいつでの交流の様子

川田さくら (M2) SAKURA KAWATA

今年度、小高復興デザインセンターの活動の一環で、南相馬市の「高校生による小高区への提案」事業の企画・運営を行っています。小高を元気にしたいという思いを持つ市内の高校生 11 名が毎月集まり、小高の復興を学び実践しています。今回は、県外の復興状況を学ぶため、石巻と女川で復興に取り組む方々にお会いしてきました。

訪問先：宮城県石巻市・女川町／期間：8月20・21日

参加者：高校生 10 名、福島 PJ メンバー 3 名、小高区役所職員 1 名

主な見学先：[石巻] 復興まちづくり情報交流館・子どもセンターらいつ・石巻 2.0 [女川] ゆめハウス・女川フューチャーセンター Camass・女川駅前商店街

石巻と女川

石巻中心部は、石巻の高校生の「石巻の魅力はおもしろい大人がいっぱいいること」という言葉に表されるように、石巻 2.0 によるリノベ施設（カフェ、IT オフィス、本屋など）や「子どもセンターらいつ」といった人が集まる「点」がたくさんありました。大きな施設はなくても、小さな点の活動が地域の脈わいに結びついている様子が印象的でした。女川では、外から人を迎え入れる駅前の空間が目立りますが、地元の方の仕事場・憩いの場である「果樹園カフェゆめハウス」のゆっくりとした時の流れこそ、地元の方々にとっては重要なのかなと感じました。

原発被災地の難しさ

『震災から 5 年“も”経ったのか、5 年“しか”経っていないのか、自分の中ではっきりしていなかったが、石巻を一通り見たとき、5 年も経ったんだからここまで復興するのも当たり前なのかと、小高との圧倒的な復興の違いに驚かされました。放射線があるだけでこれだけ復興が遅れてしまっている中、私たちが小高に出来ることは何か……』（高校生の感想より）土地の生業と地域のつながりが失われた原発被災地の復興の難しさを改めて痛感しました。

高校生とまちづくり

昨年末、急遽スタートした高校生 PJ ですが、長期的な視野での若い世代への投資の仕方、高校生のまちづくりへの参加方法など、考えさせられることばかりです。高校生がまちづくりにおけるひとつのアクターとなり、将来どこかの街のもの言う大人になる、という理想に向け模索中です。



▲女川・ゆめハウスは倉庫をリノベし、その周りでイチジクやトウガラシを育てています



▲石巻・石巻 2.0 が運営するまちの本棚。販売も貸出もしています



▲女川フューチャー Camass にて、女川の復興への取り組みを伺いました

▲柳町のリノベーション物件
(旧森永家住宅)

▲水路沿いの散歩道を歩く

▲八女福島の白壁の町並み

▲廻水路を調査する M2



▲佐賀・わいわい！コンテナ



▲八女・居蔵造りの町家が残る（写真は天保9年（1838年）建築）



▲黒木・水を有効活用するための水利施設（黒木堰と黒木廻水路）

矢吹剣一（D2）KEN-ICHI YABUKI

建築学会大会の2日前、三国PJのM2と中島伸助教らと九州へ入り、今現在三国PJで取り組んでいる空き家再生によるまちづくりの事例及び福岡県内の重要伝統的建造物群保存地区を視察した。

1日目：佐賀（「わいわい！！コンテナ」プロジェクト「柳町地区」他）→柳川（掘割他）

2日目：八女福島（重伝建地区他）→黒木（重伝建地区と堰・廻水路等の水利施設他）→（福岡へ）

今回視察した町の共通項でもあり、最も議論したテーマは、「歴史的市街地における空地の再生のあり方」だろう。佐賀（長崎と小倉をつなぐ長崎街道沿いの呉服町・柳町で再生活動が活発）は佐賀城、八女福島（旧往還道沿いでの再生が進む）はかつての福島城を中心とした旧城下町である。それぞれの町で実施されているプロジェクトは、敷地周囲のエリアに着目しながら、空地をマネジメントすることで、これまでに無かった賑わいをまちに生み出している（個人的には最近、ある種こうしたTacticalな取り組みを、大きなStrategyにどう結びつけるかが重要ではないかと考えている）。

今回は、各事例の効果を把握出来た一方で、歴史的市街地における町並み再生の新たな方法論（あるいは既存の方法論の更新）の必要性も感じた。未だ遺る城下町の都市構造に近代都市計画のプランニング層（レイヤ）が積層し、しかも全体的には人口減少が減少し続けるという複雑かつ困難な状況の中で、東京都心部のように「価格断層」などの方法論がそう安々と通用しない地方都市の実情に触れることができ、今後、三国PJで取り組むべきことのヒントが得られたように思う。



▲「おわら風の盆」の様子

越野あすか（M2）ASUKA KOSHINO

三国プロジェクトの現地調査の帰りに、富山県の八尾で「おわら風の盆」が行われるということで、プロジェクトメンバーと見学に行きました。

八尾は富山平野の南西部にある、街道の拠点として繁栄した町で、都市デザイン研がかつてプロジェクトで入り込んでいた場所でもあります。「おわら風の盆」は旧町と呼ばれる地区で行われ、山の傾斜に石を積み上げてできた細長い坂の町で行われる伝統の民謡行事です。

情緒ある踊りに感動したのはもちろん、伝統文化がまちに与える影響の大きさを感じる、印象に残る訪問となりました。初めは観光客が多く、どこで踊っているのかもわからず少し残念な気持ちになったのですが、夜遅くなるにつれ、観光客が減り、まちのあちこちで輪踊りや流し踊りが行われ、まちを回遊しながら楽しめるとても魅力的な祭りでした。踊り手は若い人たちのみに限定されていて、年長の歌い手や弾き手が後ろから見守る中で、文化が受け継がれているのが感じられました。家については、大きく開け放たれた1階の空間が親類で集まって宴会を行う場所になっていたり、2階の開口部がとても広く、修景された家の格子は開閉式になっているなど、踊りを鑑賞する空間として使いやすいように作られていました。

また、かつて花街であった鏡町という地区では、階段下の空間が舞台空間として使われていたり、諏訪町という地区では、緩やかな坂道に並んだボンボリの間が流し踊りの舞台となっていたりと、とてもうまくまちの舞台化がなされていました。「おわら風の盆」を鑑賞していて、まちの人たちの体に刷り込まれており、まちの形態と深くかかわりがあるところに、三国の三国祭と似たものがあるなと感じました。伝統文化が持つ力の強さというのでしょうか、地域住民に染み込んでいる祭りのまちへの影響は大きく、まちづくりを進めるうえで重要な要素であると改めて思いました。



▲対岸から見た八尾旧町



▲1階での宴会の様子



▲鏡町での踊りの様子

個人の記録

Personal Travelogs

1. 国内の街並みをめぐる

Strolling in Domestic Cities

森朋子 助教

TOMOKO MORI

東京→福岡市《建築学会》→福岡県うきは市 《伝建地区調査》→大分県日田市、福岡県朝倉市、佐賀県吉野ヶ里町《文化的景観・小鹿田焼の里、伝建地区・秋月、吉野ヶ里遺跡視察》→京都府京都市 《世界考古学会議参加・古墳見学・発表会参加等》→東京（6泊7日）

建築学会のあと、自然災害を受けた伝建地区調査の一環で、うきは市役所にヒアリング調査をさせて頂きました。その後1日足を伸ばし、かねてから行きたかった大分県日田市の「小鹿田焼の里」に行ってきました。ここは小鹿田焼の窯場で、伝統的な技法は昭和45年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択され、平成7年には重要無形文化財に指定されています。平成20年には、九州で初めての重要文化的景観に選定されました。



小鹿田焼の里（皿山地区）



小鹿田焼の里（池ノ鶴地区）

山間部に位置する「小鹿田焼の里」では、農閑期に窯業を行う半農半陶による自給生活をされていたそうです。文化的景観も、窯業を生業とする皿山地区と農林業を生業とする池ノ鶴地区の2地区から構成されています。皿山地区は川の谷筋に形成され、山から陶土を採掘し、川の流れを利用した唐臼で碎き、周辺の杉材を燃料とした登り窯で焼く、地域資源を活用した窯業が営まれています。山を越えた池ノ鶴地区には、狭隘な谷地に石積みと水利システムを配した棚田が広がっていました。人間がその地の自然環境を読み解き、知恵と労力を駆使し築き上げた文化的景観のお手本のような地で、本当に感動しました。

その後心細い山道を抜け、福岡県朝倉市秋月（秋月藩城下町）に出ました。江戸時代を通して形成された城下町全体が重伝建地区に選定され、武家屋敷・町家のみならず、敷地割りや道路・水路など町の基本構造が残る風情ある城下町でした。最後に急ぎ高速を走り、佐賀県吉野ヶ里遺跡に行きました。展示方法や駐車場の配置計画等、ルンビニPJで参考にしようと思います。

中井雄太（M2）

YUTA NAKAI

東京→鳥取県境港市《まちあるき》→島根県隠岐の島町《観光》→島根県出雲市《観光》→島根県太田市温泉津・石見銀山《まちあるき・観光》→東京（4泊5日）

9月初め、交通の便があまり良くないため訪れることの殆どなかった山陰を宿も何もおさえずに旅をしていました。隠岐の島から本土へ戻り、鉄道などの公共交通の不便さからレンタカーという足を得た私は、松江から120kmほど西にある世界遺産の温泉街、温泉津温泉に向かいました。残念ながら宿泊はできませんでしたが、数百年前から変わらぬ区割りの町並みに生きる静かな暮らしが非常に魅力的に感じました。



温泉津温泉の外湯や湯治場が連なる町並み

世界遺産を巡るという趣味はあまり持ち合わせていませんが、港町と温泉街が一体となり、山に囲まれた静かな町並みに佇んでいる温泉津温泉の話聞き、すぐにでも向かわねばならないと思いました。街並みは数百年前から区割りや道路幅が変わらず、山を抱えた家々はその殆どが木造で未だに古き日本旅館・湯治場となっているようでした。まち歩きの後、夕方には共同浴場の一つ、薬師湯に入り、古くからの湯治の際の入り方に倣い、金属臭と塩分味のある湯に何度も浸かり額から汗が噴き出るほど暖まりました。暖まった体を冷ましに休憩所でもある屋上に上ると、そこには夕陽に照らされてなお一層その赤みを増した石州瓦の屋根たちが、衰えを知らない盛夏の緑、まだ青さを保っている空に引き立てられた景色が広がっていました。そしてその景色を隠しても、耳を澄ますと聞こえる沢の音と近づいては遠ざかる下駄の音、時折香る汐の匂いがあり、火照った体を冷ますはずが、つい時を忘れて長居してしまいました。次に訪れたときには、決して立派ではなくてもよい、古くからの湯治場のような民宿に数日滞在したいと思っています。

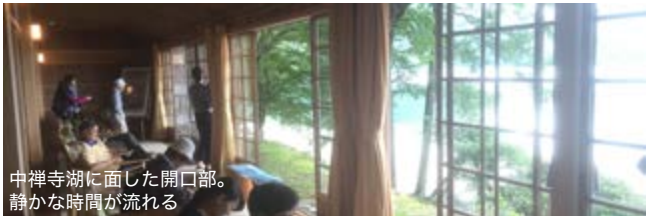


薬師湯の屋上から眺めた温泉津温泉の町並み

砂塚大河（M2） TAIGA SUNAZUKA

東京→日光・鬼怒川《東照宮が見たかった》→東京（1泊2日）

ふと思い立って、日光に行ってきました。目的は、日光東照宮とイタリア大使館別荘を見ること（温泉も）。苔むす雨の東照宮、意外に絶品な湯葉丼、華厳の滝にレーモンド建築。1泊2日にはなかなか充実した旅になりました。



中禅寺湖に面した開口部。静かな時間が流れる

神谷安里沙（M1）

ARISA KOYA

東京→福井・三国《調査》→富山あちこち・金屋町、井波、砺波など《まちあるき》→（7泊8日）

所属する三国プロジェクトではこの夏、集中調査を行いました。調査終了後に、ちょうど富山の越中八尾で、「おわら風の盆」が開催されるとのことで、古い町並みを色々と巡りながら現地へ向かうことになりました。その道中、住宅が氷田の中に点在した散居村が広がる砺波平野を一望できる場所を訪れました。それが「となみ夢の平 散居村展望台」です。



夕暮れにきらめく散居村

急カーブが続く鬱蒼とした山道を車で登っていくと、木々が晴れて一気に視界が開けました。眼下に広がるは夕暮れ時の赤い光がきらめく水田と、その間にぼつりぼつりと現れる住宅と屋敷林。水田の間を光を反射させて動く自動車は、そこに暮らす現代の人の存在を。個々の住宅と木々がまとまって散らばる光景が、稲作と共に暮らす歴史を感じさせます。住宅を厳しい風雨や寒さ、夏の日差しから守る屋敷林ですが、この場所ではカイニヨ（もしくはカイナ）と呼び、「高（土地）は売ってもカイニヨは売るな」と言って大切に先祖代々守り継いできたそうです。しかしながら、近年では木々の維持管理が負担となり屋敷林を処分する家も出てきました。その結果風景が大きく変化してきているらしく視界の端には住宅の大きさから外れた背の高い建物も見受けられました。稲作を営む人間と、厳しい自然が共存してきた歴史が感じられるこの場所ですが、山頂から広く一望される景色であるからこそ、地上レベルで広範囲にわたって配慮していくことの難しさを感じさせられました。



砺波平野を眺める三国プロジェクトメンバー

まず向かったのは日光東照宮。あいにくどしゃ降りの雨でしたが、濡れた苔の緑が鮮やかに光っていて晴れの日はまたちがった趣のある姿に出会えました。大改修中で残念でしたが、三猿たちの修繕作業をパフォーマンスとして公開していて、改修中にもこういうやり方で観光客を楽しませることができるのか、と感心して見入ってしまいました。

きらびやかな東照宮も見応えがありましたが、旅の中で特に感銘を受けたのはアントニン・レーモンド設計のイタリア大使館別荘です。目の前に広がる中禅寺湖の風景を取り入れた設計と日本を意識した素材や意匠が印象的で、忘れがたい体験となりました。世界遺産の壮大さと建築の面白さを改めて感じた旅でした。いつか湖畔に別荘を建てようと思います。



地元の杉皮を使った網代天井。網代の模様によって空間を分けている

田中雄大（M1）

YUDAI TANAKA

東京→福岡市《日本建築学会》→熊本市《震災被害・城下町》→熊本・益城《震災被害》→福岡・柳川《観光》→東京（3泊4日）

建築学会大会のついでに、江戸時代の町人地の巨大な街区をそのまま継承した熊南城下町を見ることと、4月の地震による影響を見るために熊本へ行きました。震災の被害が残る熊本城と市内の建物の様子を見ました。中心市街を歩いた後は、周辺の水前寺趣園や熊本アトポリスの一環として計画された集合住宅、震災被害の大きい益城町にも足を運びました。



県営保田窪第一団地



崩れた石垣を真横から見る

熊本城を訪れた時は、衝撃を受けました。というのも、震災が起こる1ヶ月前に卒業旅行で熊本城を訪れていたからです。5ヶ月前に熊本の街を見渡した天守閣の屋根はテレビの中に見たように剥がれ落ち、至る所で石垣は崩れていました。ただ、海外からの観光客も多く目にしました。震災による被害は観光的側面もあるんだなと思いました。市内は、鉄の足場に囲まれた建物や傾いた古い家が所々で見受けられましたが、全体としては2度の巨大震災があったとは感じられない様子でした。それでも、建物の扉に被災危険度の判定をした3色の紙が貼られている光景は印象的でした。そして、目的の100m四方の巨大街区は、まさにそこに存在していました。街区の中心のかつての会所地は、今でも寺社地や公園となり、その姿をとどめていました。真夏の日差しと暑さで、全ては見えて回れませんでした。

その後、熊本アトポリスの一環の山本理顕、新納至門による集合住宅を勝手に見ました。特殊な形態やダイナミックな動線、異素材をつなぐディテールなど建築スケールで空間を楽しみました。

2. ふるさとに帰る

Getting Back to Own Hometowns

中島直人 准教授

NAOTO NAKAJIMA

岐阜県各務原市

妻の出産予定日が8月17日でした。お盆の一週間、出産に立ち会うべく、里帰り出産のため先に実家に帰省していた妻と長男のところで過ごすことにしました。妻の実家があるのは岐阜県各務原市というところで、自衛隊と川崎重工が立地する飛行機のまちとして知られています。実際に長女が産まれてきてくれたのは8月22日の夜でしたので、結局、ねばりにねばって（いくつか用事をキャンセルしたりして）10日近く、各務原に滞在することになりました。

帰省の間、私の役目はひたすら長男（2歳10か月）の遊び相手を務めること。妻は妻で順調なお産のためには毎日適度に運動する必要がありました。しかし、猛暑ということもあって、子供と長時間遊べる場所、妊婦が安全に快適に散歩できる場所が近くにはありません。そこで、妻の実家から車で20分の巨大イオンモールに通い詰めることになりました。妻はモールの中を歩き続け、私は子供を思い切り遊ばせることのできるキドキドへ。これまでの人生での総滞在時間を越えるくらいイオンモールにいて、その空間とパブリックライフをじっくり勉強した結果、私のアーバニズムは少し寛容になったかも知れません。

でもこの夏の帰省で本当に一番印象に残った風景は、長女が産まれた日、妻が入院する病室で仮眠し、翌朝5時過ぎの始発列車で帰京する際、JR高山線的那加駅の跨線橋からふと眺めた各務原のまちの夜明けです。毎日毎日繰り返すごく平凡な一日の始まりの風景ですが、私と私の家族にとってはかけがえのない時、新しい時の始まりの特別な風景となりました。



8月23日の夜明けの風景

柏原沙織 (D3)

SAORI KASHIHARA

兵庫県西脇市・京都市伏見区

夫の実家・兵庫県西脇市に続いて私の実家・京都市伏見区へ、お盆の時期に合わせて里帰りしました。主な目的はもうすぐ3歳になる娘を祖母に会わせることと、中学からの親友に会うことでした。「日本のへそ」兵庫県西脇市は県のやや中ほどに位置する人口約5万人の田舎町。播州織、釣り針、美術家の横尾忠則が有名です。伏見は京都駅から南に下った酒所。実家の近くには宝酒造の工場や「洛南一の商店街」大手筋があります。

ニュータウン育ちの私にとってお墓は遠くにあって想うものですが、夫の実家ではすぐ裏山の家を見下ろす場所にお墓があります。夫の祖母は毎日祖父の仏壇にお経をあげるのが習慣だったり、朝夕に仏さんのご飯を替えたりと、日常の動作の一部として亡き人を悼む気持ちが習慣化されています。お盆にお寺さんが来る日は、縁側から勝手に上がったお坊さんがお経をあげていました。畳に正座し読経の声を聞いていると、日常と地続きになったご先祖様の存在を感じます。故郷への愛着に先祖から続く時間軸の感覚は自分には薄く、この場所に自分が根ざしている実感を持てることが羨ましく思えました。

京都では友達と会いに河原町二条の町屋改装カフェ Very Berry Caféへ。話し足りない2人でぐずる娘をベビーカーに乗せて散歩がてら、河原町通から三条通に入り、新京極通を下って四条通に抜けると…何か違う！昨年行われた四条通の歩道拡幅、噂では聞いたものの実際に見るのは初めてで、とにかく興奮しました。地元商店街のチェーン店通り化、通った高校の建替など残念な変化を見た後で、歩道拡幅は久しぶりに嬉しい変化でした。



庭の水まき中の義父と娘。この奥にJR加古川線の線路、更に奥にお墓のある裏山の斜面



歩道が拡幅された四条通。バス待ち客の列が歩行者の邪魔になってない！

三文字昌也 (M1)

MASAYA SAMMOMJI

愛媛県今治市

愛媛県今治市の一番端、瓦の生産で有名な海沿いの小さなまちにある祖父母の家に居候をしてきました。なんと台風直撃で、家から出ずただ本を読んでいたのですが、その後台風一過の晴れ間を使って今治の街へ。しかしまあ、今治市の中心部は大変なことになっています。バイパスが市街地を迂回し、春には巨大イオンモールが郊外にできました。一方中心市街地の衰退は著しく、駅から港に至るアーケード街はほとんど空っぽ。本当に縮図。



なんだかセンスがよい店内

昼食にも困っていたところ、街の中に一軒、非常に怪しい匂いを醸し出している「JAZZ SHOP」なる看板を発見。入ってみるとブルー・ノートの影響か青い壁のDIYな内装。お手製のウーファーからはレコードのノイズとともに小気味良いジャズが6畳程の狭い店内に流れ続け、店いっぱいのU字カウンターに並ぶ客席の一番端にはおじいさんが足を投げ出してフラッシュの袋とじヘアヌードを眺めている。壁中に並ぶはレコード・コレクション、カウンターの中にいるのはパイプに葉を詰めて火をつけるところだった79歳のマスター、聞けば一人で開店して53年になるそう。ドア開けた瞬間、震えました。やばいとこ来ちゃった。

帰るわけにもいかず、震える足で席に着き黙々とコーヒーを啜っている間にも、また別の常連さんが来て、帰って、ものすごく出入りが多いことに驚かされます。当然、見たことないガキには常連さんの好きな目が向けられ、自然といろんな話を振られ続ける。異世界でした。また行きたいです。



近くまで本当に営業しているのかわからなかった

3. 離島を訪ねる

Visiting Islands in Japan

黒本剛史 (M2)

TAKESHI KUROMOTO

東京→島根県西ノ島《絶壁を観光》→島根県海士町《観光・視察・釣り》→東京（2泊3日）

島根県隠岐に位置する海士町は、2000人の島民に対し400人の移住者が集まり、地方創生のモデルとして注目される有名な島です。インターン先の建築家夫妻と私の3人で訪問しました。
1日目：米子空港から海士町（中ノ島）へフェリー3時間。隣の西ノ島に渡り、岸壁を眺めるクルーズ。夜は海を目の前にキャンプ。
2日目：地元漁師案内のもと船釣りへ。垂らせばすぐ釣れる入れ食いで、30匹近くの魚を持ち帰る。3日目：学習センターや図書館、小学校リノベ事例などを視察。

海士町。注目されるだけあって、面白い方が集まります。視察に来たという乙武洋匡さんと居合わせ、一緒にご飯を食べました。たいへん魅力的な方でした。

そして、全国から集まる移住者や島民による、たくさんの心踊る動きを見してきました。その一つ、人口維持を狙い、高校生を島にとどめるための「高校魅力化プロジェクト」を立ち上げて推進している豊田庄吾さんにお話を伺い、彼の立ち上げた学習センターを案内してもらいました。島前高校180名のうちなんと150名が通っているという島唯一の塾で、受験対策のみならず、「米ビジネス」など実践的なゼミも行っています。古民家を改装して作ったラウンジは地域にも開放され、とても居心地の良い空間で高校生が勉強していました。

脱サラして海士町という新天地で起業し、地域の課題に正面からアタックしていく豊田さんの生き方に魅了され、背筋の伸びる旅となりました。そして、クリエイティブな面が注目される一方で、島の大部分は農業・漁業ののどかな山村が広がる、時間の止まったような島で、そのギャップが新鮮でした。

中村慎吾 (M1)

SHINGO NAKAMURA

東京→東京都青ヶ島村<観光>→東京都御蔵島村《観光》→東京都三宅村《観光》→東京（4泊5日）

東京都心から360km南の伊豆諸島に浮かぶ青ヶ島。大きなカルデラを有するこの絶海の火山島に、人口160人余りの日本一人口が少ない村がある。村へは八丈島から週4便運航される船でアクセスできるのだが、船の就航率はきわめて低く、辿り着くのは容易ではない。今回、幸運にも島への上陸が叶い、2泊3日でこの小さな村を見て回った。

青ヶ島を訪れて何をしたかと言われれば、大して何もしていない。強いて挙げるとすると、山に登ったり、島唯一の集落を散歩したり、「地熱窯」で食材を調理したぐらいである。

この村は産業も娯楽も乏しい村である。しかし、村民の暮らしは決して貧しくはない。本業をしながら片手間に野菜やニワトリの世話をし、暇ができれば居酒屋に集う、そんな自由でのんびりした生活を彼らは営んでおり、暮らしはむしろ豊かだという。何も無い村だが、何も無いからこそ無駄な欲を持たず、日々を満足に過ごしているのだろう。

この村には立派な小中学校や郵便局はもちろん、発電所や浄水場など村民の生活に必要な施設が一式整備されており、殆どが村外から来た者の手によって維持されている。そのコストを考えるとこの村の存在はあまりに非合理的であるかもしれないが、極めて特殊な地理条件のもとに成り立つこの村の人々のユニークな暮らし様は余所では再現できないに違いない。ユニークな暮らし様を残すために、この村には長く変わらずあってほしいものだ。



島の高校生が実践的な経験を重ねる隠岐国学習センター内装



少し街を外れると、道端に牛馬が闊歩する閑かな風景である



島の最高地点・大凸部（オオトンプ）からカルデラを見下ろす



外輪山の外側に広がる村内唯一の集落

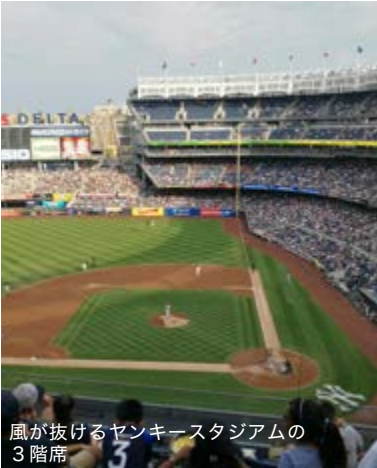
永野真義 助教

MASAYOSHI NAGANO

東京→アメリカ・ニューヨーク《調査・打合せ》→東京（7泊9日）

未訪だったNYを踏破しておくべく7泊9日、他の都市には行かず、マンハッタンを中心に歩き倒してみました。最新建築のほか、ウォーターフロント開発、新しい形のパブリックスペース、アーバンファーマーミング、リノベーション事例を見学。また数日は現地の知人と再会し、NYという街の楽しみ方を体感してきました。





風が抜けるヤンキースタジアムの3階席



栈橋をリノベーションしたPier15

過密都市マンハッタンの中心部には無数の小さなオープンスペースが展開されていますが、ビルのアトリウムや通路も含め、とにかく"PUBLIC"と大きめに書かれているんですね。さすがアメリカ人は主張が強いと思いつつ、実際以上に自分たちが使っていい空間がたくさんある気がして嬉しくなります。

そして日本だとベンチに座ってペットボトルを飲んでしまいがちですが、自販機がほとんど存在しないNYでは、自然とカフェでテイクアウトして、お洒落なひとときを過ごすというスタイルが実現されます（日本の自販機は多すぎ？）。一方でセントラルパークや水辺沿い、栈橋まわりにはまとまった公園がつくられていて、こちらはシートを広げたり音楽を掛けたり水着になったりと、公共空間の私有化が見事になされています。

実はメジャーリーグの試合を見にヤンキースタジアムを訪れたのですが、ここも娯楽施設というより公園のよう。寝てる人、本を読んでいる人、喋ってばかりの人。思わず私も居眠りしそうになりました。あ、ちゃんと田中マーくんのピッチングは応援してきましたよ。

児玉千絵（D3）

CHIE KODAMA

東京→ブータン・パロ 《文化的景観保全WS調査》→ブータン・ティンブー《調査成果発表、僧院タングの見学、マンション開発地視察などなど》→東京（16泊17日）

国土全体が文化的景観とも言うべきブータンで、その保全に向けた国際ワークショップ（WS）に今年も参加してきました。今回も全ての調査・発表を終えた後、恒例の1日エクスカッションへ。例年は文化局の企画で寺院などの文化施設を見学してきましたが、今年は公共事業省からWSに参加していたブンツォ氏とその友人たちに案内をお願いし、首都ティンブー郊外で棚田をアパート群に開発した地区計画の敷地を見学しました。





水田からアパート群に開発された首都郊外



第1回パネル会議の様子

ブータンWSも3年目。今年は地区レベルの保全計画を立てるA班と、県レベルの広域計画を立案するB班に分かれ、全2回のパネル会議で各省庁・地方行政体の具体的連携策を議論しました。私が参加したB班では、同年代のブータン政府官僚と共に、押し寄せる開発に対して如何に広大な文化的景観を維持・強化することができるか、調査をもとに発表しました。開発が進む国で同い年の彼らが直面する壁やその仕事の影響力に触れ、ある種の羨ましさを抱きながら、本当に必要な開発・支援の難しさを実感しました。

調査発表後、B班で一緒だった公共事業省のブンツォ氏曰く、首都郊外に水田から開発された地区があるとのこと。とても気になって、彼の友人の車で案内をお願いしました。昔の日本もこうして少しずつ都市が広がっていったのかと感じさせる、できたてほやほやのアパート群。都市の必要性、自然／社会環境と都市の関係に思いを馳せつつ、身体スケールでの心地よさが圧倒的に欠落した開発地にて、やはり都市デザインにしかできないことがあると再認識したのでした。

西川亮（D3）

RYO NISHIKAWA

東京→ロンドン《家族訪問》スコットランド・インバネス《観光》→イギリス・アイアンブリッジ《産業遺産訪問》→レッチワース《田園都市訪問》→東京（8泊9日）

都市計画を専門としていれば知らない者はいないイギリスの小さな町。ここはロンドンの北、鉄道で1時間ほどの距離にある。昨年から頻繁にイギリスを訪れる機会があったが、今回ようやく訪れることができた、First Garden City Letchworth。





公園からラウンドアバウトに至るまでの並木道

降り立った駅の名は「Letchworth Garden City」。ガーデンシティの提唱から100年以上が経った今でもレッチワースはガーデンシティの名を守っている。駅周辺には低層の商業地域が面的に広がる。「Garden City Brewery」や「Garden City Craft」といった店名の看板を見かける。ガーデンシティが都市のアイデンティティレベルにまで浸透しているのだろう。商業地域を抜けると大きな公園に当たる。公園では子供連れ家族や地元の中学生などがそれぞれの時間を過ごしていた。更にまっすぐ進み、公園を抜けると美しい並木道が広がる。そしてその先にはイギリス最初のラウンドアバウト（アンウィンがパリのシャルルドゴール広場にヒントを得たと言う）。これらが1本の軸線上に配置され、レッチワースの中心軸を彩っているのだ。ラウンドアバウトから10分ほどの距離にある「The International Garden Cities Exhibition」も見逃せない。ここではガーデンシティのコンセプトやハーワードの生涯などがコンパクトにまとめられていた。

そのほかハーワードの名がついた「Howard Park and Garden」やいくつかの重要な建築物を回ってレッチワースを後にした。観光案内所で手に入れた、レッチワースのマスタープランが印刷されたテーブルクロスが良い土産になった。

宮下貴裕（D2）

TAKAHIRO MIYASHITA

東京→ドイツ・ミュンヘン 《中心部散策》→レーゲンスブルク 《旧市街散策》→イタリア・ヴェネツィア 《本島を散策》→ヴェローナ 《旧市街散策》→東京（9泊10日）

8月にイタリアとドイツを訪れました。最も印象に残った場所はヴェローナの旧市街にあるエルベ広場とそこにつながるマツツイーニ通りでしたが、こちらは雑誌等で取り上げられている場所なので、ここでは2度目となったヴェネツィアでの散策のときのことについて記したいと思います。3年前に訪れたときは春だったためそれほど観光客がおらず「生活」が感じられたのですが、今回はあまりの人の多さから全く違う印象を受けました。





道の入口にマリア像の彫られたアーチが掲げられている

今回は陣内先生の著書『迷宮都市ヴェネツィアを歩く』で紹介されている街歩きルートを制覇するというテーマを自分に課していましたが、人混みが苦手な私は2日目には早くも人が溢れる表通り（といっても細街路ですが）を歩くのに疲れてしまいました。そんな中リアルト橋のたもとから伸びるサリッツァダ通りを進むと、左手に小さなゲートを冠した通りが現われました。「Calle del Paradiso（天国の道）」という名を持つこの通りについて、文献で読んだ限りは華やかな商店街を思い描いていましたが、実際に来てみるとあまりにもひっそりとしている。陽が差し込む中にむき出しの木の梁がずっと先まで続いている光景は他では見たことのないものでした。しかし何が「天国」なのだろうと先に進むと、通りの終わりにマリア像が彫られたアーチが現われました。そしてそこには小さな運河が流れ、橋の階段に学生が座っておしゃべりをしている。なるほど、こちらが表だったのか。橋を渡った道の入口で出迎えてくれるそのかわいらしいアーチは、まさに私たちを天国にいざなっているようでした。



駅から公園に至る道路。車道の中央に歩行者道が設けられている。



小さな商店が建ち並ぶ「天国の道」

濱田愛 (M2)

MEGUMI HAMADA

東京→カトマンズ《調査》→東京 (7泊8日)

ネパールでは昨年4月に発生した大地震からの復興が未だに続いています。カトマンズPJでは文化庁の文化遺産保護国際貢献事業による文化財の視点からの復興支援として、首都カトマンズの南西に位置し世界遺産暫定リストに登録されるコカナという農村集落を対象地として、その歴史的町並みに関する調査分析提案を実施しています。今回の渡航では、昨年度に引き続いた町並みに関する調査に加え、昨年度の成果を住民の皆さまへ報告する住民説明会が開催されました。



なんとこれ、お酒を作っているそうです。自家製酒には、麦から作ったものと米から作ったものがあるんだそうです。



コカナのメインストリートでは、1日に数回やぎさんたちが行進します。この他に、犬やアヒルがたくさんいます。

航空機の遅延が重なり、ネパールの首都にあるカトマンズ空港におりたったときにはもう、真夜中になっていました。じんわりと自分の緊張を感じつつ、空港の出待ちをするタクシー運転手さんたちの怒号を頭の片隅で聞きながら、促されるままにタクシーに乗り込み空港を離れました。先生がタクシーの運転手さんと交渉してくださっているのを聞きながら、車窓を流れていくでこぼこして小さな建物たちが立ち並んだカトマンズの夜の景色に見入ります。軒先を出歩く人々、徘徊する犬たち、ガタガタの道、車のクラクション、土埃。それが私とネパールの出会いでした。強い強い、思い出になりました。

調査対象地のコカナには、それから6日間毎日通いました。そこでは出会ったばかりの農の暮らしと科学技術の進歩がたくさん化学反応を起こしているようでした。道やまちかどには時間の流れがあって、農作業や音楽や宗教や動物や憩いの場が連続的かつ流動的に入れ替わる様は、言葉で形容しきれない何か大切で根源的な力を持っているように感じます。

大変な経験や生活をされているにもかかわらず突然訪れた我々に優しく家の中を見せてくださるコカナの皆様の暖かさは、日本での調査と同じものを感じました。

松田季詩子 (M1)

KISHIKO MATSUDA

東京→イタリア・ローマ《観光》→イタリア・オルビエート《地下洞窟が見たかった》→ヴェネツィア《空洞化の噂を聞いて》→ローマ→東京 (10泊11日)

有名都市だけだと右往左往の観光に終始してしまうだろうと思い、新鮮な海産物をいただくという目的のもと、日帰りローマ近郊の小さな町、アンツィオを訪れてのんびりしました。片道€3.5、1時間の電車の旅で、日本の湘南と比すとまったく言いすぎですが、現地の都会人が休日に憩いに来る穏やかな港町です。



イタリアで取れたての魚介類を食べるならぜひアンツィオへ。



奥に見える人工物らしきものが遺跡。この足元も遺跡です。

寂れつつも嫌にはならない静かな雰囲気を持つまちで、一目で気に入りました。青緑色の海に白い漁船が泊まる港の姿は岬の西側ではがらりと変わり、ささやかながら手入れの行き届いた海水浴場が現れます。アジア系の観光客の姿は全く見えず、時折英語も通じず、有名都市に比べて本当に知らない土地にいるのだなあという感覚。食べ物を一通り絶賛したのち、水着ではしゃぐ沢山の親子連れに気が引けて、遠くから海を眺めていました。

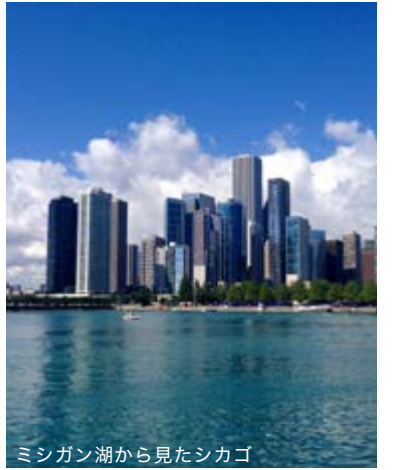
ふと、先ほどのレストランが遺跡を土台に建っていることに気づきました。崩壊した遺跡を背もたれにして海水浴客が寝転んでいました。2000年前の皇帝一家の邸宅跡地なのに。これが建造物として機能した時代には、この地はこれだけの人々を受け入れていたのだろうか、ということを感じました。遺跡が風化するままになっている理由は、大量の歴史資源を抱えるイタリアでは消極的なもの、当たり前の光景かもしれません。でも結果的には、覆わないことがこの遺跡を人の暮らしと地続きのパーツの一部にしている。日本と文脈の異なる空間の中で、ローマ中心の遺跡群の特異さについても考え直させられました。

福本遼子 (B4)

RYOKO FUKUMOTO

東京→アメリカ・シカゴ《プログラム参加のため》→ニューヨーク《観光》→ポートランド《観光》→東京 (14泊15日)

東大の体験活動プログラムに参加するため、アメリカ第三の都市、イリノイ州のシカゴに1週間滞在してきました。プログラムではシカゴで働く日本人の方々と、東大のOB・OGを中心に訪問し、その傍らシカゴ市内の建築群や近郊の町の観光を楽しみました。冬は寒さの厳しいシカゴですが訪れた時はからっとした暑さが続き、ミシガン湖でボートを楽しむ若者や、湖沿いに広がる公園でくつろぐ幅広い年齢層の人々の様子が印象的でした。



ミシガン湖から見たシカゴ



ミレニウムパークにあるザ・観光地。通称 'the bean'

プログラムの休日、ミシガン湖に出ようと思って市内を歩いていると、「湖に行くなら下のトンネルを歩いていくのよ」と近くに住んでいるのだろう、おばさまが声をかけてくれました。シカゴの至る所で目にする立体交差をくぐると、ビル群から一転、広大な水辺にたどり着きます。湖のほとりにはボートのメンテナンスをする家族連れ、ランニングしている普段はシカゴの摩天楼の中で働いているだろうおじさま、水着ではしゃぐ若者、シカゴ川をクルーズする観光客など、多くの人が集まっていました。

日が翳り始めると、ミレニウムパークの芝生広場に向かいます。周りにはワインと軽食を持って場所取りをする人々。お目当ては、建築家フランクゲーリーによる野外コンサートホールで夏の間開かれる、無料コンサートです。涼しい風に吹かれながらのオーケストラ、贅沢な時間でした。摩天楼がそびえ立つ大都市シカゴの、市民の楽しみ方を垣間見ることができました。他にも道を曲がれば有名建築にぶつかるダウントウンや、フランク・ロイド・ライトの作品が多く残る近郊の町オークパークなど、見どころの多い街でした。

都市デザイン研究室の皆様、アンケートにご協力頂きましてありがとうございました。

次のページから西村先生インタビュー「街の灯」を想像するために▶



「街の灯」を想像するために —西村先生インタビュー—

His Long Way into the "Living Stars"

——The Interview with Prof. Yukio Nishimura

研究者としてあちこちの土地を訪ねられ、都市デザイン研随一ともいえる豊富な「旅」の経験を持っていらっしゃる西村先生。

このたび、普段お聞きしないようなエピソードから、各地を来訪される際の熱い思いまで、幅広く語っていただきました。

(聞き手：M1 神谷・中村・松田、編集：M1 松田)

▶知られざる旅の思い出

- 幼少期や学生時代の旅で、印象深かったものはありますか。

高校が福岡だったから、高校のときに同級生と2人で、九州を1週間かけてぐるっと1周した。親との旅行はそれまでにもあったけれど、自分で行きたいところを探して、宿を探して、というのはこれが最初だった。お金がないので、ほとんど各駅停車で回った。志布志とかでは、着いたときにはすでに暗くなっていてどこに泊まろう、となったなあ。当時は高校生だったので、どういう方向に進むとかはあんまり考えていなかったけど、自立して旅したというのは思い出になった。

あとは、誰にも言っていないんだけど、都市工の学生時代に、ヒッチハイクで東北を1周したことがある。本郷に下宿してたんだけど、夜に本郷通りでトラックを捕まえて、助手席に乗って新潟に行って、新潟から青森に

行って、青森から太平洋側を上ってきた。ほとんどお金を持っていなかったの、ずっとトラックに乗ったり、野宿した。福島あたりまで辿り着いたときに、列車に乗れるお金が足りたので、そこから列車で帰った。

- 行きたい場所、目的地があったわけでは無いのでしょうか。

いろんな所に行きたいというのがあった。まだ研究室には所属していなかったから、帰省以外で意識的に街を見る機会はなかった。

その時に行った日本海側の象潟のあたりのことは、いまだに覚えている。新潟まで着いて、西に行くか東に行くか迷ったんだけど(笑)。奥の細道ゆかりの地で、今は水田が広がっているんだけど、昔は湾だったのを干拓したのかな。その景色を見ながら、昔はこんな景色だったのかな、とか考えた。そのころから風景を考えるのは好きだったと思う。

今でもそうだけど、列車とか飛行機に乗っていても、外を見ると飽きない。道とか山、

どういう集落とか、こういう所にはこういうふうにしてまちができるとか。

日本の地形ってアップダウンが多く、小さな谷とかもいっぱいある。そういう所に集落ができて農地が広がっている、というのを飛行機の上から眺めると、すごく行ってみたいと思う。

- 訪れた中で、特に好きな土地はありますか。

都市計画をやっていると、いろんな人からの町が好きか聞かれるんだけど、非常に質問(笑)。どの町にもそれぞれの個性と魅力があると思うし、どのまちが好きとは言い難い。ただ、学生時代から関わり、その後もずっと関わり続けているまちに対する思いは当然ある。その意味で、個人的な思い入れのある場所は、例えば、飛騨古川とか高山とか。ドクターの頃に自主的に研究したところでは、静岡県磐田市の見附宿。あと、助手になってから調査した福井県若狭町の熊川宿とか、新潟県の村上とか。懐かしいし、今で

もそういうところとは交流がある。

特に古川のことを話すと、歴史的なものとか個性を生かすまちづくりをやっていたわけだけど、ぼくらの時代には、そういうことをやって成果が出るのが未知数だった。例えば今はいろんな都市で実施されている電線をなくす事業も、電線がなくなるというのが当時はありえなかったの、合意ができなかった。だからぼくらのやっていることが本当に世の中に受け入れられるのか、まちを変えられるのか不安だった。自分で大事だと思っても、世の中にそういう前例がないからね。

そのなかで古川は、我々の若干の貢献で少しずつ変わっていった。ぼくの力というよりは地元の人々の頑張りだけど、毎回行く度に良くなっていていくという実感、実証を示せたという実感があつた。古川とは付き合いはじめて30年を超えたけど、20年ぐらい前、成果が出始めたころに、古川のことをまちはこう変わるんだ、と紹介できたのはぼくの自信にもなったし、大事にしたいと思った。だから、思い出深い。

あと、前から思っているけど、魅力的なまちには魅力的な人間がいる気がする。自分のまちに愛着や誇りをもっていると頑張れるのかな。自分のまちのために頑張っている人がいると、こちらでも感化されるね。

▶このまちに住むとはどういうことか、を考えて訪れる

- 今回は旅特集と銘打ってはいるのですが、先生がまちを訪れることは、「旅」という言葉では表現しきれないような気がします。

旅というよりは調査だね(笑)。いわゆる観光のような旅ってやっていないんだよね。休みはだいたい原稿を書いているし、そのためには勉強もしないといけない、そういう情報を摂取するのも嫌じゃないのね。

どこかに行くときには目的がある。例えば講演に行くだけとか、行政・民間で頑張っている人たちの付き合いとか、きっかけはいろいろあるけれど、いろんなまちを見に行きたくて行っているの、影響も旅そのものからというより、関わった都市から受けるよね。旅行の道中で、いい景色とか、守られてる景色を見たりして、感動することとかはあるけど、それぞれの都市にいろんな意味でかわってきたので、そちらのほうが強い。



上：岐阜県古川町（現飛騨市）、瀬戸川沿い、1985年

下：同、1995年

- いろいろなまちを訪れるなかで、自分にこれを課そう、といった信条のようなものはありますか？

ひとつは、地図を見なくても歩けるようになりたい。海外とかでも、頭のなかにまちの全体を入れたい。1日で歩ける範囲は限られるが、2〜3日まちを歩くとだいたい全体が地図を見なくてもわかるようになる。2泊すると足掛け3日は居られるから、それぐらいまちに滞在して、ひとつひとつのまちを学んでいくことを心がけている。そういうふうに都市のことを身に着けるのは大事だと思っているし、それが出来てはじめて次のステップにいける。だけど最近はそのいいかな、時間がないからね(笑)。

もうひとつは、まちのプロになるからには、どの都市に対しても、この都市はこうだ、地図を見て背景がどうだから、私はこう思う、という意見を持っていないと恥ずかしいという思いもあった。いろんな所に行ってきたと、そのまちの風景を見て、地図を見て、まち

の顔を思い浮かべられるようにしたい。日本は広いし、全部のまちでそうできるわけではないけど、かなりの所ではそれやってきた。

- まちに入って地元の感覚みたいなものを身に着けるという感じでしょうか。

このまちに住むとはどういうことか、を考えるかな。調査ではそこから具体的に歴史を勉強するでしょう。そうすると、こういうまちのありかたはすごく面白いな、という部分が見えてくる。生活のイメージが湧くし、こういう生活もあり得るよね、というのがある。

- 地元の人の愛着を感じつつ、研究者として公正な目をもたないといけない、というような葛藤は生まれませんか？

我々は観察者じゃないので、完全なニュートラルな姿勢はないと思ってる。学者だからニュートラルだというわけじゃない。学問のなかにはニュートラルであることがいいと思われる分野もあるけど、我々の世界は解釈しているだけではだめで、問題があれば解決するし、いいものがあれば残して磨く、という

ごく当たり前の一つ一つの街の明かりが違う世界の中にあるんだということを、 イマジネーションをもって見たい。

プロアクティブさも必要だからね。地元の人
の想いに寄り添って、そこで住んでいる人にと
って力になるようなことをやるうというの
が基本的なスタンス。

だから、地元の人への想いをぼくなりに感じ
るとこういうことじゃないか、とかぼく自身
が感じる強み弱みとかがあって、それがいろ
んな提案になったり計画につながっていく。

もし、自分の中に第三者的なものがあると
すれば、それはいろんなまちと比較できたり、
そのまちの人とは違う感覚があることかな。
ニュートラルというよりは、違うことで地元
のひとの力になるようなものの見方を持って
いる。例えばなんでこの道が曲がってるんだ
ろう、というのは、普通まちの人は意識しな
いが、理由はある。つまり「都市空間の構想
力」だけど、当たり前の都市空間でも楽しめ
るには歴史を見て、古い地図をちゃんと見て、
というのをやっておかないと、ぱっと見てで
は確証をもってできない。そういう手がかり
を持ちながらやるわけだよ。

ぼくの講演や講義は、教えるというより、
自分が面白いと思うもの、発見、これはほか
にないんじゃないか、ということを経験から
しゃべっている。そのまちを面白がっている
という意味では第三者的で少し引いているけ
ど、これはそのまちに対するぼくかなりのポジ
ティブなメッセージなんだ。ここがだめ、あ
そこがだめ、ということではない。講演を聴
くと元気が出る、とよく言われる。だって、
良くないことを言ってもしょうがないしね。
改善しなければならぬことはあるが、それ
は言い方次第だし、元気が出れば改善につな
がる。

▶ 誰かの見ていた景色、 誰かの見ている景色を想う

- いままで色々な場所を訪れたなかで、印象
に残っているエピソードを教えてください。

なかなかうまく説明できないんだけど、今
から 30 年以上前に北海道・小樽運河保存運
動があった。東京に住んでいたから応援団み
たいなことしかできなかったが、リーダーに
なってるカリスマ的な女性（峯山富美さん）
がいた。その頃は現代でいうと鞆の浦とか国
立のマンション問題のように、小樽運動のこ

とが全国的なニュースになっていて、目立つ
ことを喜ぶ人ではなかったんだけど、反対運
動のリーダーとしていろんな形で活躍して
露出もしていた。当時で年は 60 を過ぎてい
て、たいへん物静かだけど、話をするとなぜ
だか皆が感動するような深いところから言葉
が出てくる。ご主人は高校の先生で考古学者
で、主人を尊敬してるとたまにおっしゃって
いた。ご主人は保存運動の場面には参加して
おられなかったけれど。

全然別の機会に、世界遺産のことをやって
る関係で、北海道・北東北の縄文遺産群の調
査中、伊達市の北黄金貝塚を見に行った。
昔は浜辺だったんだらうけど大きい貝塚があ
って、ほとんど人がいないような丘陵地に
広いエリアが保存されている。きれいな風景
の所で、今はビジターセンターみたいなのが
ある。近くの高校生が最初に発掘してから、
今の保存に至ったというものらしかった。い
ろいろ話を聞くと、なんとその高校の先生が
30 歳位の時の峯山さんのご主人だった。

その頃は峯山さんはもう仕事も辞めて、普
通の主婦としてそこに生活してただろうと思
うんだよ。ご主人が高校の考古学クラブか
何かでそういう保存をやっていて、当時はす
ごく大変だったのを、峯山さんは主婦として
支えながら、この景色を見てたんだらうな
と思った時にさ、小樽の運河の問題が起きな
ければ峯山さんは前面に立つこともなかったか
もしれない。人間ってそんなものなのかなあ、
というのを考えたんだよ。

峯山さんも運動の中で最初からリーダー
だったわけじゃなくて、以前のリーダーが亡
くなったり、経済界からの圧力で動けなくな
った中で、利害関係がない主婦だからこそ
動けたということがある。だけど、運動のリー
ダーが、問題がなければごく普通の日常を送
っていて、ごく普通の日常のまま亡くなっ
てただろうと。

峯山さんのことを考えるとセンチメンタル
になるんだ。堂々たる日常を過ごすというか、
つまり、当たり前の生活を送っていることも
実は非常に大事で、自分にどうしてもやらな
いといけない場面がきたら、そこで頑張るん
だと。峯山さんの場合はそんな場面が晩年に
きて、それをきちんとやった。そんな堂々た

る日常を送れるような人間というのは本当に
素晴らしいなと思って、その景色を見たとき
に、ああこの景色なんだなあ、と沁みたんだ
よね。それが非常に感動的な景色だった。そ
んな思い出があるね。

- 景色単体というより、色々な事情を知って
いるからこそ、その景色に意味が加わってく
るんですね。

そういうことだと思う。普通の人にとって
は普通のきれいな大草原なんだけど、それを
超えて、そこに生活した思いが見えてくる、
みたいなことがありうると思う。

やっぱり、風景って、それぞれの人の見る
思いがあって、見え方も一人一人違うんだよ
ね。そういう風に見えてる、というものが大
事だよ。そういうものに対するセンシビリ
ティをすごく持つ必要があると常々思ってい
て、いろんな機会に言っている。

これも思い出深いんだけど、電車に乗って
いたとき、夜になって、ぼつぼつと街の明か
りが見えるじゃない。その一戸一戸の家庭で
全然状況が違うわけだよ。家族構成も違う
し、経済状況も全く違う。違う生活があっ
て、違う会話があって、違うドラマがある。
でも見えてるのは同じ光の点なんだよね。それ
を見たときに、ごく当たり前の一つ一つの街
の明かりが違う世界の中にあるんだというこ
とをイマジネーションをもって見れる、都市
を考えるときにはそういう人間としてのセン
シビリティを持ちたいと思った。都市には静
かな、ある意味寂しいような農村風景も、賑
やかな部分もあるけど、それぞれの中でそれ
ぞれの人が生活しているイメージを自分のも
のとして感じられるように。

我々は 1 つの人生しか生きられないから、
我々の持っている家庭のイメージとか両親の
イメージとかは自分のイメージでしかない。
でもやっぱり、都市を扱うことは多様な人た
ちを扱うことなので、多様な社会がありえて、
地域社会がある。そのときに、計画をやる人
間としては、自分の世界とはいろんな所で感
じ方とか考え方が違ったとしても、それを 1
つの社会なんだと感じられることがすごく大
事。「自分はここの生活をしてるわけじゃな
いけど、イマジネーションの中でそこの生
活を生きることはできる」と。





周りの緑の帯は長幕とよばれる林で、
隆起した環礁が森となったもの。天然記念物。
――北大東島、沖縄県

そうしないと、ぼくらは外の人間なので、「外の人間に、自分たちのことがわかるのか。そんなやつに言う権利があるのか」と言われた時に、自信がないと立ちすくんじゃうわけだね。だって、100%わかるわけじゃないから。でも、それぞれが自分がわかったといっても、見方は一人一人違うわけだし、ひょっとしたらぼくだって、他の人たちと同じくらいわかっているかもしれない。いろんなものを見てきて、そのなかで自分が感じたこと、様々なイマジネーションの手がかりも持っている。今自分なりに感じているもの、それにはそれで意味があるんじゃないかと、自信をもっていい。

ただ、自分たちがここでなんらかのコミットをするのに意味があるんだと思えるためには、きちんとしたイマジネーションを持つ必要があると思う。だから旅は、いろんなものを見るってのが大事なんだね。

▶ 帰りの飛行機にて

- いま伺ったエピソード自体も大変重要なメッセージだと思いますが、学生に向けて、行くべき場所や、どこかを訪れる上でのメッセージをお聞きできたらと思います。

なるべくたくさん見るんじゃないかな。世の中、想像を超えるようなこともいろいろ

あるから。でもやっぱり、見ても感じなければ単なる写真のコレクションになる。今言ったような、思いを持ちながら見るのが大事。すると、そうかこんなこともあるのか、というのが随所にあって、日本の小さい島国でも、いまだに発見がある。

去年かおととしに、北大東島って所に行った。台風がよく来る所で、天気予報で出るのは南大東島なんだけど、そのすぐそばにある絶海の孤島なわけだよ。セーシェル諸島じゃないけど、サンゴ礁のビーチがあって平たい島かなあと思っていたけれど、全然違って、海岸がぜんぶ完全な絶壁になっている。サンゴ礁が盛り上がってできたから海沿いにすごく丸いマウンドがあって、森が帯のように連なってて、小さな集落の真ん中にいると、周りが森で囲まれてるから、本当に小さな島なのに海が感じられない。海側もそのまま水深がガーッと1000mくらい落ちてるから、ビーチもないし船もつけられない。港にクレーン車があって、クレーンで船のお客さんとお客さんの荷物を順番に吊り上げる。まずそんな場所があるのかという驚きがあった。

すると、そういうとこの生活ってクローズだから、すべての人がすべての人を知ってるわけだね。すごく窮屈に思えるんだけど、しかしこれがまた面白い距離感を持ってい

る。夜、飲みに行きましようとなって、暗いなか集落の中のどこに行くんだろう…と思っていたと、普通の住宅みたいな所が飲み屋になっているんだよ。入ると普通のテーブルがあっていろんな人がいるんだけど、外からだ全然わからない。そういう飲み屋が何軒かあって、みんな知り合いなのに、店ごとに来る人の雰囲気がちよっとずつ違うらしい。ぼくは村長さんと飲んでたんだけど、普通のおじさんみたいな感じで、その空間にみんながいる。ちょっとした会釈くらいはするけど、べたべたしないで、それぞれ自立している。確かにしょっちゅうべたべたしてたら息苦しくてしょうがない。

那覇から1時間飛行機に乗らなきゃいけない、それ以外に道はないみたいな所で想像ができなかったんだけど、安定して、それなりに楽しく生活を送れる世界があると知った。今のは極端かもしれないけど、やっぱりいろんなところを知るっていうことは、自分の中でももう少し多層的にものを見ることにつながるかなと思えるね。

それからもう1つ、行くべき場所とあまり関係ないんだけど、今まで人生の転機になるようなことを考えたのは、海外の帰りの飛行機が多いんだよね。海外へは会議に行くことが多いんだけど、行きは、会議の準備を飛行

10 時間以上も 1 か所にずっといて、ひとつの海外に行った時の刺激を熟成させているのは、貴重な機会じゃないかと思います。

機の中でしてるか、ギリギリまで準備して疲れはてて寝てるか、とにかく会議が終わるまでは移動してるだけという感じがする。

会議が終わって、1 日くらいはそのまちを見たりして、色々考える。北大東島でもそうだったけど、海外に行くと生活がもっと違うから、よりいろんな点で自分のことを相対的に考えないといけない。そういう経験をしてから、帰りの飛行機に乗る。飛行機の中で電話はかかってこないし、昔はメールもなかったけど、メールも何も来ないから、じっと座ってるだけじゃない。そうすると、ぼーっとすることもできるんだけど、あれを見てきてこれからどういう事をやるのが正しいのか、自分にとって正しいのか、とか、すごい考えるんだよね。だから研究テーマだったり、いろんな大事なことが結構決まる。

例えばぼくの場合だと、10 年単位で、20 代、30 代で何をやるか…っていうのを考えてきた。20 代は、ずっと一人前になるためのトレーニングだと思ってきて、ちょうどドクター論文も書いたりした。では、30 代になって自分はというテーマでなにをやるか？ぼくはそれまでは日本の国内の現場のことをずっと考えてて、楽しかったけど、調査

潰けだったから海外の旅行にも行ってなかった。だから、もう一回外からちゃんと見ようということで、イギリスのことをやって、最終的に何冊かの本にまとめた。

30 代の飛行機の中だったと思うけど、40 代で、もう一度、日本のなかで考えて、ちゃんとした学問体系を作り上げないといけないと思い、都市保全計画というちょっとしたディシプリンをやろうとした。今までやったことについて、きちんとした通史とか教科書にあたる本が残っていれば、次のジェネレーションの人たちは、そこから出発できて新しい次のことに進めるから。普通は 50 代でやったほうが集大成なんだろうけど、たぶん 50 代はもっと忙しくなるだろうな、と思ったのは当たりだったね（笑）。

旅それ自体の刺激もあるわけだけど、10 時間以上も 1 か所にずっといて、ひとつの海外に行った時の刺激を、ある種熟成させているのは、貴重な機会じゃないかと思います。映画なんか観てるとそれで終わっちゃうんだけど、そういうときに考えてののやってないのとだと全然違うよ。映画はまあ、これから封切り前のやつがあったりすると、観たくもなるけどね。

▶ムスリムの国に行ってみたい

-最後に、これから、旅をしてみたい / 行ってみたいという場所がありますか？

会議とかのチャンスがなかったから、あんまりムスリムの国に行っていないんだけど、そういう所に行きたい。モロッコとかに行ってみたいなあ、昔から思ってた。本当はバグダッドとかにも行きたかったけど、今はちょっと危ないよね。南米の幾つかの国も見てみたいと思っています。でもまあ、半分自分の好奇心だから、行けるようになるというなあ、と思いますけどね。

あとは日本のなかでも、なかなか行きたくても行く機会がないまちがいくつかあるので、行ってみたいと今でも思うね。

* * *

ご多忙な中、抽象的なテーマのインタビューにも関わらず快くお答えくださり、本当にありがとうございました。

お話を聞いていると、その景色のイメージが不思議と思い浮かびます。お話の面白さだけでなく、「思いを持って見る」豊富な経験があるからこそなのかな、と思いました。■



✧ 編集後記

松田季詩子（M1）

今号編集にあたって、研究室の全ての方から多大なご協力を頂きました。お忙しい中、突然のメールに時間を割いての情報提供、本当にありがとうございました。おかげさまで2016 年の「西村研の夏」を目に見える形で記録した一冊が完成しました。ここにあるのは24 ページ分の版面ですが、文や写真といった「風景」の奥に横たわっている、個人の鮮烈な記憶やその地域で蓄積されてきたつながり、そういった原色の部分に思いを馳せていただければ幸いです。

黒本剛史（M2）

おかげさまで、壮大な号となりました。西村先生の言葉にもあったように、旅という非日常の時間から感じることで、得るべきものは、無限大にあるのでしょうか。この夏を振り返る、良い機会でした。この24 ページに記録できたのは、研究室全体の旅という膨大な体験集合の1% 未満だと思います。このマガジンをきっかけに、「ここどうだった？ おすすめは？」といった、学年を越えた交流・雑談・討論が起り、残りの99% を埋めて頂けたら本望です。

中村慎吾（M1）

「都市工の人間はフットワークが軽い」とよく言われるが、本巻はそれを雄弁に物語っているように思う。編集を終えて実感したのは、いつ誰がどこにどういう目的で行ったのか、全然把握できていないということだ。周りには自分の行ったことのない土地を知る人がたくさんいる。より多くの土地を知りたい私にとって、そうした人たちと情報交換を行わない手は無い。短い人生のなかで自らあらゆる土地を開拓して回るのはほぼ不可能なのだから。



URBANDESIGN
LABORATORY